



施設イチゴにおけるヒメナガカメムシの発生生態と薬剤防除

愛媛県農林水産研究所 くぼ 窪 た 田 せい 聖 いち 一

はじめに

ヒメナガカメムシ (*Nysius plebeius* Distant) は、カメムシ目マダラナガカメムシ科ヒメナガカメムシ属に属するカメムシの1種で、ヒメナガカメムシ属は日本では5種の分布が確認されている (NAKATANI, 2015; 中谷, 2016)。害虫としては、イネ、イチゴ、カンキツ、カキ、マンゴーで記録されており (日本応用動物昆虫学会, 2006)、イネの穂を吸収して斑点米を起こしたり (川澤・川村, 1975)、育苗箱中の水稻苗に寄生し、葉が巻き込んだり、こより状を呈する被害が発生した記録がある (伊藤ら, 1999)。愛媛県においては、2016年に宇和島市の施設イチゴにおいて本種が多発し、成熟果に10頭前後の成虫が寄生し、吸汁している事例が認められた (図-1)。イチゴでは、果実を吸汁されたことによる奇形果の発生が報告されている (川澤・大平, 1978) が、イチゴにおける本種の発生生態や有効薬剤等については不明な点が多い。本稿では、筆者らが愛媛県の施設イチゴで実施した生息状況、薬剤の感受性検定等の調査結果を中心に紹介したい。

I 被害

川澤・大平 (1978) によると、本種が多発した施設では奇形果率が30%と高くなっていたが、殺虫剤散布後は3~4%と低くなっていることから、奇形果の異常な発生は本種の吸汁加害に起因したものと推定している。愛媛県農林水産研究所内の本圃において、幼果に袋掛けを行い内部に成虫を放飼したところ、奇形果の発生が認められた (図-2)。この症状は果頂部の発育が妨げられたもので、無放飼区においては奇形果の発生が認められなかったことから、本種の加害によるものと考えられる。

農家圃場においても奇形果はある程度の率で発生しているものと考えられるが、奇形果は生理的要因など種々の条件下で発生するため、本種による奇形果の発生につ

Ecology and Chemical Control of *Nysius plebeius* Distant in the Greenhouse Strawberry. By Seiichi KUBOTA

(キーワード: *Nysius plebeius*, 薬剤感受性, 果実保護ネット)

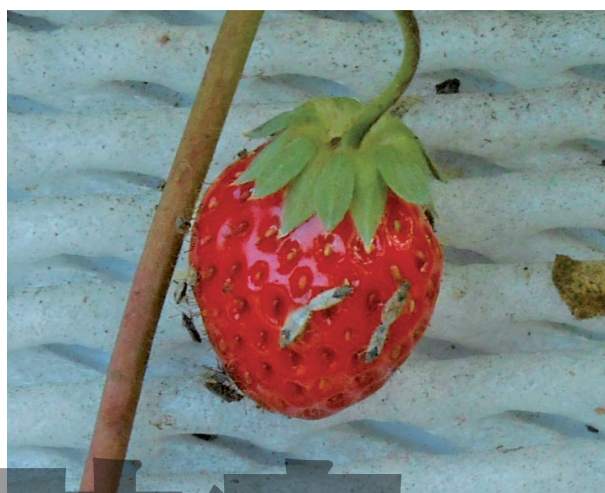


図-1 イチゴ成熟果で吸汁するヒメナガカメムシ成虫

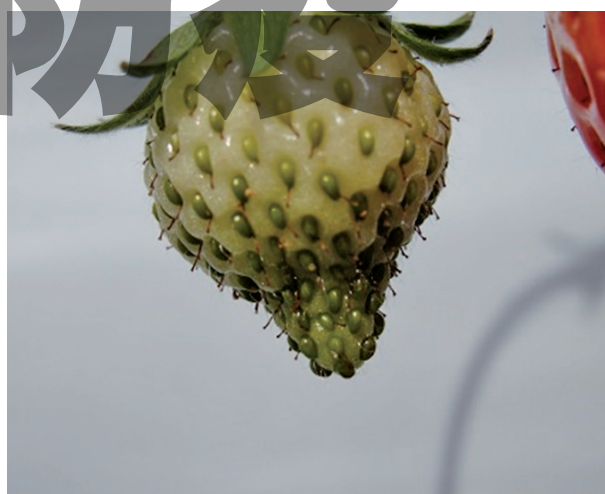


図-2 ヒメナガカメムシ成虫接種による奇形果

いて農家は認識していないようであった。

II 発生生態

1 本圃内での生息状況

宇和島市吉田町の調査において12月には各發育態が確認されることから、秋期には施設内に侵入していると考えられる。植物体上および施設内での発生場所調査によると、マルチ上で見つかる個体が最も多く、最も少ない日で59.6%、最も多い日で82.2%、平均して71.8%の